むすんで、うみだす。

ISSN 0287-976X

Lib.

京都産業大学図書館報

Vol. 44, 増刊号
(Dec. 20, 2017)

第13回 京都産業大学 図書館書評大賞

入賞作品掲載号

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品および講評	
＜大　賞＞	4-5
＜優秀賞＞	6-11
＜佳　作＞	12-21
アンケート	22
統計	23
概要	24

表紙：原田　昂大（経営学部　３年次生）

入賞者発表

第 13 回京都産業大学図書館書評大賞には 68 篇の応募があり，図書館書評大賞選考委員会で選考した結果，次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の 50 音順

大　賞

氏　名	所　属 年　次	書評タイトル 『書評対象図書』（著者名等）
えのもと　めい 榎本　明	文化学部 国際文化学科 ２年次生	美しき青年の堕落と破滅 『ドリアン・グレイの画像』（ワイルド作 ； 西村孝次訳）

優 秀 賞

おか　ふうま 岡　楓真	外国語学部 ﾖｰﾛｯﾊﾟ言語学科 ３年次生	国家機密暴露の衝撃と代償 『暴露 ： スノーデンが私に託したファイル』（グレン・グリーンウォルド著 ； 田口俊樹，濱野大道，武藤陽生訳）
たけむら　こうすけ 竹村　公佑	文化学部 国際文化学科 ２年次生	小説と向き合うために 『一億三千万人のための小説教室』（高橋源一郎著）
もりい　こうた 森井　航汰	文化学部 国際文化学科 ２年次生	天才探偵の誕生と立役者の語り手 『モルグ街の殺人 ； 黄金虫』（エドガー・アラン・ポー著 ； 巽孝之訳）

佳　作

こうむら　ともこ 上村　友子	外国語学部 ﾖｰﾛｯﾊﾟ言語学科 ２年次生	煌きの裏側には 『ミッキーマウスの憂鬱』　（松岡圭祐著）
しまだ　ゆういち 嶋田　裕一	経済学部 経済学科 ３年次生	理解への認識 『空飛ぶ広報室』（有川浩著）
たかざわ　たつき 高澤　樹	文化学部 国際文化学科 ２年次生	万城目学の面白くも神秘的な世界 『偉大なる、しゅららぼん』（万城目学著）
つつい　まい 筒井　茉衣	文化学部 国際文化学科 ４年次生	アンパンマンの遺書 『アンパンマンの遺書』（やなせたかし著）
はやし　かいしゅう 林　海秀	経済学部 経済学科 ３年次生	孤独な青年の像 『三四郎』（夏目漱石作）

選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会
図書館長　井尻　香代子

今年度の京都産業大学図書館書評大賞イベントは，６月23日(金)に来学された第153回芥川賞作家，羽田圭介氏の力強く魅力的なご講演とともに幕を開けた。図書館３階から１階Lib.コモンズ（図書館ホール）に続く階段には，開場30分前より長い行列ができ，定員を上回る200名超の来場者となった。

羽田氏は「思考を発酵させるための蓄積」について自らの読書経験を生き生きと語りかけ，とりわけ中学１年時のドストエフスキー『罪と罰』上巻の読書と，作家となった後の同作品下巻の読書とを隔てる14年間に，静かに進んだ思考の蓄積と発酵の過程を例に挙げて説明された。また，文学作品を読んでも，インターネット検索によって他人の感想を自分の感想だと思い込むケースが多いことを批判し，「自分はどういう風に思ったか，どういう風に理解したか，どういう風に捉えたか」を自分一人で考えることの大切さを指摘した。このようにして思考を発酵させることから生まれる他人との差異と，その組み合せが，唯一無二のオリジナリティを生み出すとの明確なメッセージを送られた。

第13回書評大賞入賞者のみなさんは羽田氏のメッセージを的確に受け取り，これまでの読書によって蓄えられ発酵した多様性に富む思考を，書評作品の中に見事に繰り広げている。大賞入賞の文化学部２年榎本さんは，オスカー・ワイルド著『ドリアン・グレイの画像』のキーワードである「美しさ」を若さや残虐さ，外面と内面などさまざまな角度から分析し，「美」という力のもつ恐ろしさを描き出した。優秀賞は外国語学部３年岡さんのグレン・グリーンウォルド著『暴露：スノーデンが私に託したファイル』，文化学部２年竹村さんの高橋源一郎著『一億三千万人のための小説教室』，文化学部２年森井さんのエドガー・アラン・ポー著『モルグ街の殺人；黄金虫』を対象とした書評が選ばれたが，それぞれ「表現の自由」「生きた言葉」「語り手の役割」というテーマを設定してまっすぐに作品世界に切り込み，「書物」が生み出す豊かさの秘密を解き明かしている。また，佳作入賞の方々は，社会の表裏，偏見と理解，不思議な世界，正義と優しさ，青年の孤独など，現代社会を生きる私たちを取り巻くさまざまな側面に対して，自分はどのように捉えるのか，じっくりと思考する力を見せて頂いた。

書評大賞は７月３日から９月４日まで募集され，応募数は68篇(67名）だったが，応募要件外のものを除いて，65篇が第１次選考の対象となった。第１次選考は書評大賞選考委員会の委員(教員と事務職員)が２名１組計５組であたり，それぞれ３段階で評価した。その結果，20篇が第２次選考に残った。第２次選考は10名の書評大賞選考委員が日本語の体裁，内容の要約，批評する力を基準に審査し，大賞１名，優秀賞３名，佳作５名を選んだ。丁寧な思考と的確な表現力によって展開された批評が２度の選考を通過し，委員全員一致で入賞作９篇が選出された。今年は，経済学部，経営学部，法学部，現代社会学部，外国語学部，文化学部，コンピュータ理工学部，総合生命科学部の8学部にわたる全ての学年からの応募作を集めることができ，その達成を教職員ともに心より喜んでいる。

今回入賞作９篇のうち，５篇が文化学部２，４年生の入賞となったが，その大きな要因とも考えられる取組みを紹介しておきたい。今年度４月より文化学部国際文化学科でスタートした「むすびわざブックマラソン」である。各年次に学生が所属するゼミを拠点として読書を促進し，４年間で100冊読了を目指している。このたびの快挙がいっそうの弾みとなれば幸いである。

最後になったが，お忙しい中選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方，図書館職員の方々，そして，ご協賛頂いた京都産業大学同窓会，丸善雄松堂株式会社，株式会社紀伊國屋書店の皆様にあらためて厚くお礼を申し上げたい。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

大　賞

文化学部　２年次生

榎本（えのもと）　明（めい）

書 名 ： 『ドリアン・グレイの画像』

著 者 ： ワイルド作；西村孝次訳

出版社・出版年 ： 岩波書店 ， 1967

「 美しき青年の堕落と破滅 」

よく人は歳をとるにつれて外見の美しさだけではなく，内面の美しさが表情に現れるという。老人でも皺（しわ）として誠実さが刻まれた人は美しく見えるし，若くても身勝手で残酷な人はその心が顔に出るものだと。しかし，表面的な美しさに惑わされずに判断することは簡単ではない。

オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの画像』に登場する主人公ドリアン・グレイは，素晴らしい美貌をもつ純粋な青年である。彼の友人で画家のバジルは，ドリアンの純粋さとその美貌を崇拝し，彼の肖像画を描いた。しかしドリアンは，バジルの友人で不道徳な快楽主義者のヘンリー卿に感化されてしまう。自分の若さと美しさはいずれ失われる。それならば老いて醜くなる前にと，若さを謳歌（おうか）するため堕落し始めるドリアン。「いつまでも若さを失わずにいるのがぼくで，歳をとっていくのがこの絵のほうだったなら！」ドリアンのこの願いは現実になる。バジルの描いたドリアンの肖像画は流れていく月日と，次第に醜くなる彼の心を反映して醜悪に老いていく。一方若く美しいままのドリアンは，周囲の人間をも破滅的にさせる恐ろしい男になっていく。

ドリアンの周囲の人々は彼の悪評がいくら広まろうとも，美しく魅力的な彼に次々と惹かれてしまう。特にドリアンの美に自らの芸術を結晶させた画家のバジルは，彼の悪評を信じようとしない。周囲の人間を汚名や醜聞にまみれた堕落へ突き落とした男とは思えないほど，ドリアンはいつまでも無邪気な若さをたたえて美しく微笑んでいるからだ。読者はドリアンの独白で彼の内面が次第に堕落していく過程と肖像画の変化を知る。登場人物は知らず，読者にのみその経過と結果を予想させる劇的アイロニーは，一つの警告となっている。私たちは人の本質を過（あやま）たず見抜くどころか，見たいものしか見ることができず，美しい人の心は美しいものと勝手に思ってしまうのだ。

ではオスカー・ワイルドの描く「美しさ」とはなんだろう。この物語の背景には，ヴィクトリア朝時代の耽美的，退廃的傾向がある。耽美派とはまさに「芸術のための芸術」。芸術には道徳や非道徳など存在せず，ただ「美しい」ことに意味があるというフランス生まれの思想だ。アイルランド人の著者，オスカー・ワイルドも耽美派の一人で，彼は物語の序文に「美しいものが『美』だけを意味するひとびとこそ選ばれた民なのだ」とも書いて

いる。これはヘンリー卿の快楽哲学にも反映されている。美しさと若さ。物語に一貫して，この二つは何物にも代えがたい素晴らしいものとして扱われる。ヘンリー卿の「青春！青春！青春をおいてこの世に何が残るというのだ！」といった言葉によって，ドリアンはそれまで無自覚であった自身の美と若さを自覚する。ヘンリー卿はドリアンが老いると，青春とともに「美」さえ失われると教えた。ヘンリー卿は，若く美しいままのドリアンが享楽的に生きている姿に芸術を見出す。画家バジルは，ドリアンの若さがもつ純真な精神と美貌に自身の芸術を見出す。しかしその純真さを失わないようにと願うバジルの言葉は，ドリアンには響かない。ドリアンは悪魔的なヘンリー卿の言葉にこそ魅力を感じ，強く信じてしまうのだった。青春は原文で「Youth」と表現されている。繰り返される青春という言葉は「若さゆえの純真さ」という文脈でも使われるが，「若さゆえの未熟さ」ともいえる。こうしたドリアンの美をめぐる三角関係は，まさに「ロマンスにいろどられた友情」として描かれる。しかしバジルの芸術が生み出した肖像画によって，ヘンリー卿が作り出した芸術としてのドリアンの人生が破滅するというのは，実に因果的ではないか。

ヘンリー卿によって「生き始めた」ドリアンの残虐性は，美貌というアドバンテージと，肖像画によって得られた永遠の若さによって加速する。自分の美や若さが保障されているという意識は「何をしてもよい」という傲慢さを生んだ。ドリアンが辿る破滅的な最期は，彼が本来有していた残忍な性格による運命か，それとも彼を取り巻く環境がまねいた悲劇だったのか。そしてドリアンを含む登場人物達のように，何故私たちは「美しさ」に踊らされてしまうのか。「若さ／未熟さ」という美しさが隠ぺいするものは何か。この物語は，青年の若く美しい外見と醜い内面の対比を美しく装飾的な文体で描き，当時「有毒の書」と評された。オスカー・ワイルドの美しく耽美な世界の中で，あなたなりの答えを探してほしい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法学部教員　若狭　愛子**

本作の著者オスカー・ワイルドは，アイルランド出身の著名な詩人・作家であり，多くの作品を世に残している。有名なオペラ『サロメ』や寓話『幸福な王子』の作者でもあり，日本でも，文豪が彼の作品を翻訳するなど影響を受け，現代でも作者の名前は記憶になくとも誰もが一度はその作品に触れたことがあるのではないだろうか。本作はそんな彼の代表作ともいえる長編作である。本作の内容は書評にあるとおりなので，ここでは触れないでおくが，作品に漂う哀切感や退廃的なイメージが，オスカー・ワイルドの世界を堪能させてくれる。

さて，私は，書評とは，作品をコンパクトに解説しつつ，批評を加えた文章であると考えている。選考委員として，数十点の応募作に目を通したが，多くは批評ではなく，感想文であったり本の帯にあるようなキャッチコピー様のものであった。本書評は，本作のストーリーを紹介した上で，登場人物から距離をおいて客観的・中立的に作品を批評しようとしている。また，全体に読みやすい文章で書かれていること，著者のオスカー・ワイルドの世界観についても分析を試みようとしたことも高く評価できた。

入賞者から一言

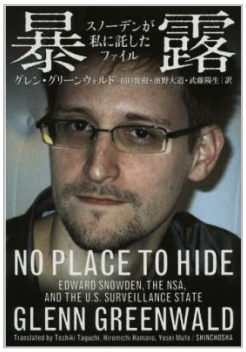
今回このような賞をいただき，誠にありがとうございます。まさか自分が選ばれるとは思わず，驚きと共に大変嬉しく思います。書評という形で文章を考えるのは難しかったのですが，いつもと違った目線で作品を読み解くことができ，とても楽しかったです。この書評で多くの人に少しでもオスカー・ワイルドの耽美的な世界を伝えることができればいいなと思います。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

外国語学部　３年次生

岡（おか）　楓真（ふうま）



書 名 ：『暴露 ： スノーデンが私に託したファイル』

著 者 ： グレン・グリーンウォルド著；
田口俊樹，濱野大道，武藤陽生訳

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2014

「 国家機密暴露の衝撃と代償 」

命をかけて超大国の権力の闇を暴き出した元スパイの勇気と恐怖――。世界をあっと言わせた国家機密暴露の一部始終を克明に，そしてスリリングに描き出した迫真のノンフィクションである。まさしく事実は小説より奇なりで，情報戦を舞台にした現代世界のいびつな支配構造がくっきり浮かび上がってくる。

2013 年６月，当時 NSA(米国家安全保障局)の職員だったエドワード・スノーデンのリークにより，米国の違法な監視体制が明らかになった。米政権はありとあらゆる手段を駆使して米国民の一挙手一投足を密かに監視している――。この驚くべき実態を暴く機密情報をスノーデンから託され，世界に公開したのが本書の著者でジャーナリストのグレン・グリーンウォルドである。スノーデンと著者グリーンウォルドはなぜ，身の危険を冒してまで国家機密を暴露したのか？　一体，何を世界に伝えようとしたのか？　本書はグローバル化の流れとともに加速するデジタル時代の落とし穴に対して警鐘を鳴らす一冊である。

まず第１章と第２章で，スノーデンと著者が CIA(米中央情報局)や NSA などの追跡捜査から身を隠すようにして内部告発の準備をする様子が描かれている。その中で彼らの使命感や恐怖心のような様々な感情も率直に表現され，読む側はサスペンス映画を観ているような緊張感を覚える展開となっている。ストーリー展開の面白さは事実の衝撃度を反映している。本書の圧巻と言える。

スノーデンが暴露した多くの機密文書の詳細な内容を分かりやすく解説しているのが第３章だ。特に興味深いのは，NSA がマイクロソフト，ヤフー，グーグルといった名だたる IT 企業と協力し，国民の情報を違法に入手していた PRISM プログラムである。一般市民の個人情報を収集し，政権に反抗するような行動をしていないか監視するのが狙いだ。世界的な IT 企業群が米政権の国民監視を支援してきた事実に愕然とする。米国民はこうした実態が暴露されるまで，「国家が国民を監視することはない」という米大統領の言葉を信じて疑わなかった。スノーデンが身の危険を顧みずに国家の犯罪を暴露したのは，まさに国民に真相を知ってもらい，行動してほしかったからである。

「監視の害悪」と題する第４章では，NSA による徹底した監視がテロを防ぐことに，実際はほとんど役立っていないことを指摘している。テロとは無関係である貿易や経済などの

分野で，米国は優位になりたいがために諸外国を監視しているという，信じられない事実も明らかになった。最後の第５章では，第四権力といわれるメディアの衰退について取り上げている。国家の犯罪や暴走を監視し，追及するのが最大の使命なのに，最近は機能しないことが多い。例えば，伝統ある高級紙のニューヨーク・タイムズはスノーデンの暴露事件を報じる際に，米政府から「公表するな」と政治的圧力を受けたという。この状況は，森友・加計学園問題や防衛省の日報隠蔽問題に関して安倍政権が日本のメディアに圧力をかけている構図と重なる。「国境なき記者団」（本部パリ）が毎年発表している報道の自由度ランキングでも，日本と米国は大きく後退していることからもうかがえる。

近年スマホや SNS の発展により，誰でも自由に情報を手にし，共有することができる。中には「悪いことをしていないのだから，国に監視されても構わない」と言う人もいる。私も本書を読むまではそうだった。しかしスノーデンは別の図書で「プライバシーはなにかを隠すためにあるのではありません。プライバシーはなにかを守るためにある。それは個です。プライバシーは個人が自分の考えをつくりだすために必要なのです。」と述べている。監視によって表現の自由が抑制されたら，私たちは言いたいことを言えなくなり，ありのままの自分ではいられなくなってしまう。プライバシーや表現の自由を守ることは，未来を守ることにもつながる。スノーデンと著者グリーンウォルドが告発を決意したのも，民主主義をないがしろにする国家権力の乱用を危惧したからである。

米国の国民監視の実態は決して他人事ではない。日本政府もこれまでに，日本版 CIA や日本版 NSA の創設を画策していることが明らかになっている。日本で同じようなことが起きないとは言えない。すでに共謀罪も成立した。もしかしたら，すでに身近な生活の場で監視の目が光っているのでは……。そうした危険性を，スノーデンは逮捕命令と国外亡命という高い代償を払って，私たちに教えてくれた。個人対国家の闘いになれば，個人に勝ち目はない。しかし，国民が意識を高め，団結し，メディアの報道の自由やインターネットの表現の自由のために声をあげるようになれば，状況は一変する。国家が一番恐れているのはそれだ。世界情勢が流動化する中，民主主義とは何か，自由とは何かについて考えさせられる良書である。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経営学部教員　箕輪　雅美**

書評が書物の内容の紹介と批評からなるとすれば，この書評の長所は内容紹介の部分にある。評者は刺激的な言葉から構成されるテンポの良い文章を使い，本書の魅力を存分に読者に伝えることに成功している。評者の文章に触れた多くの学生は，きっと本書を手に取ってみたくなるであろう。

しかしその一方でこの書評には批評の部分に不足が存在する。それは批評の対象を完璧な完成品と捉え，批判的視点を欠いていることからくるものと思われる（この点は他の多くの応募作にも共通している）。簡単に言えば，批評対象の良い点だけを伝え，悪い点を伝えていないということである。およそ人間がつくった作品に完全無欠のものなどはないと仮定すれば，本書にも欠点や不備が存在するはずであり，客観的な視点からそれを抉（えぐ）り出し，読者に伝えるのも書評の大切な役割である。可能性を感じる評者だけに，次はこの点に留意し，さらに上のレベルの書評を目指してほしい。

入賞者から一言

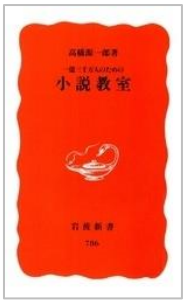
この度は選出していただき，誠にありがとうございます。優秀賞をいただくことができ，大変光栄に思います。私の書評の本は，世界を震撼させた内容でたくさんの海外メディアが当時は報道しました。しかし，日本ではあまり報道されず，この事を知らない方も多いはずです。私の書評を読み，本を手に取ってから，真実を知ってもらえれば幸いです。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　２年次生

竹村（たけむら） 公佑（こうすけ）



書 名 ：『一億三千万人のための小説教室』

著 者 ： 高橋源一郎

出版社・出版年 ： 岩波書店 ， 2002

「 小説と向き合うために 」

物書きになりたいという漠然とした夢から小説の書き方を解説したハウツー本を手に取る機会が増えた。この本もそれに該当するが，今まで私が手に取った教則本とはまったく内容が異なっている。文章を書くことに慣れていない初心者へ向けた，必ずヒットする小説の書き方のコツを教えてくれる訳ではない。むしろ，それを期待していた読み手にとっては時間を返せと言わんばかりの内容である。だが，この本を読み終えた後に今まで読んできたハウツー本よりも，もっと濃いものを私は確かに受け取った。

本文は作者と読み手である生徒役の対話式で書かれている。その名の通り，教室の中で行われる授業のように，あらゆるジャンルの小説の一部を教科書として引用し，小説を書く上で大切な“鍵”を私たち読み手に与えてくれる。その鍵というのは，いずれも最初は理解しがたい内容である。例えば，「小説の，最初の一行は，できるだけ我慢して，遅くはじめなければならない」や，「小説は書くものじゃない，つかまえるものだ」といったように。

どういった意味なのか理解に苦しむ。しかしどこか惹きつけられる。そう思えた人のために少し解説しておきたい。

最初の一行はなるべく我慢する。それはどういうことか。例えば小説を書こうと思い立ったとし，ストーリーや登場人物を事細かに決めるとする。大体の設定が決まり，主人公の家族構成を考えていた時に，ふとまったく関係のない別のことを思い立ち，そのことが脳裏に焼き付けられ，それ以外の事は何も考えられなくなってしまう。そして，最初に考案していた小説ではなく，そのことを題材にした小説を書きたいと思ってしまう。このようなことが起こることは稀ではない。一行目を書くタイミングというのは非常に難しい。しっかりと時間が満ちてから「今だ！」という時に筆を執ることが大切だという。

そして二つ目，小説をつかまえるということ。書くこととつかまえることはまったくの別物であり，この本の重要なテーマになってくる。簡単に説明すると，今書こうと思っているものを私は本当に理解しているのだろうか。それを追究することが小説を書く上での

優秀賞

“つかまえる”という行為なのである。

このように，時に遠回りに，時に抽象的に書くためのポイントを教えてくれるのだが，まどろっこしい説明はいいから早く進めてくれといった短気な読者も多いはずだ。私もその一人であった。しかし，この本を読み進めていくにつれ，彼の意図していたことをだんだんと分かり始め，読了した頃には彼の思惑にまんまと嵌（はま）ってしまったことに気付いてしまうのだ。それが感動であるか苛立ちであるかは実際に読んで確かめてもらいたい。

この本が従来のハウツー本と違う点，それはこの本そのものが小説だということだ。作者である高橋源一郎は非常に多くの小説をこれまで読んできており，小説を誰よりも愛している。小説は，書き手から生み出される“生きたことば”に興味を持ち，それを捉え，その人自身の世界と付き合うことだ。当書には多くの彼自身の生きたことばが存在し，この本が彼自身の小説であることを示してくれている。

彼は小説を愛しているのと同時に人間を愛しているのではないか。書き手から生み出される一語一句には全て理由があり，その細かなニュアンスや句読点から作者の人間性に翻弄される。それが小説である。きっと彼は誰よりも人間に興味があり，全てを受け入れたいという願望と寛容性を持っているのではないか。

小説を書きたいなんて思っていなければ，読むことにすら関心の無い人にこの一冊を是非薦めたい。矛盾しているようにも思えるが，ラインで友達と話すことが好きなんて人にとってはうってつけの一冊であろう。小説を読むということは文字を読むことだけではない。作者の世界に付き合い，遊ぶことなのである。人間に興味があり，人間と関わることが好きな者にとっては，読書は最高の娯楽であり，この本を通して今後色んな本を手に取ってみたくなることだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　経営学部教員　箕輪　雅美**

評者の，作者の意図を捉え，本の内容を理解し，それを伝える能力は卓越している。内容の紹介は的確でわかりやすく，しかもその背後にある作者の意図についても十分な言及がなされている。中でも本書評の白眉は，最後に評者が『一億三千万人のための小説教室』という小説の書き方のハウツー本を装った「この本そのものが小説だ」と看破するくだりであろう。

一読しただけでは，この書評はそのほとんどが内容紹介に充てられており，書評のもう１つの構成要素である批評というパートを欠いているように見えるかもしれない。しかし講評者は，内容紹介と並行し，評者が作者の意図を検討・推測するプロセスそのものが作品への批評となっていると考える。その中には弱いとはいえ，批判的精神の萌芽を見ることもできる。その芽をせめて双葉に育てることができていたら，大賞作品に比肩（ひけん）する作品になったのではないかと考えると，その点が少し惜しまれる。

入賞者から一言

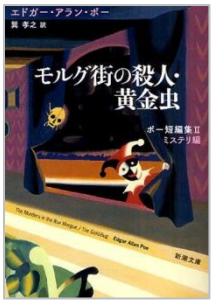
今回，優秀賞を頂けたことを非常に光栄に思います。評価を得られたことも勿論ですが，自分で紡ぎ出した言葉で大好きな本の良さを伝えられたことが純粋に嬉しいです。文章を書くことに関してはまだまだ未熟なので，より精巧な文章を書けるようにこれからも精進します。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

優秀賞

文化学部　２年次生

森井（もりい） 航汰（こうた）



書 名 ： 『モルグ街の殺人 ； 黄金虫』

著 者 ： エドガー・アラン・ポー著 ； 巽孝之訳

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2009

「 天才探偵の誕生と立役者の語り手 」

エドガー・アラン・ポーが世に送り出した名作，『モルグ街の殺人』は，世界初の推理小説である。彼こそが，今日も愛され続けている推理小説の生みの親なのだ。この作品を特徴づけているのは，グロテスクでショッキングな描写と，鮮やかに謎を解く名探偵デュパンの存在だ。この臨場感溢れる描写により，読者の頭の中に鮮明に風景が浮かび，一瞬にして読者を物語の世界へと引き込み，事件解決への欲求を高める。そして深まった謎を解き明かす名探偵デュパンの明晰さを物語の語り手が引き立てる。

まず物語の概要を確認しておきたい。事件はモルグ街にある，レスパネー夫人とその娘が住む屋敷の四階で起きた。朝の３時ごろ，街の住民たちは恐ろしい金切り声で目が覚め，８～10 人の隣人と憲兵が部屋へ向かった。一団が部屋へ着くも，内側からカギが掛かっていたので，扉を無理やりこじ開けて入るとそこには破壊された家具があたり一面に散乱していた。さらにベッドは床から剥がされ，イスには血だらけのカミソリが置かれていた。そして暖炉へ行くと，煙突に逆さまにして無理やり詰め込まれたレスパネー嬢の死体が見つかった。レスパネー夫人の死体は裏庭に横たわっていた。

この事件の惨状の描写の中でも次の箇所は特にグロテスクだ。「彼女の喉は完全に掻き切られていたため，起そうとすると首から先がころころと外れてしまった。その頭蓋と同じく身体のほうも鳥肌が立つほどに切り刻まれており，もはや人間のしるしをとどめているとは言えないほどであった。」これはレスパネー夫人の死体の描写であり，物語の中で最もこの事件の異常性を表している部分であるだろう。こうした描写が読者の怖いものみたさを刺激し，また事件の真相を知りたいという欲求を高める。

モルグ街の殺人事件は証拠が不十分であることと，人間には到底出来そうもないトリックのせいで捜査は難航するが，名探偵デュパンはこの謎に包まれた事件を鮮やかに解決していく。彼は小さなヒントからその答えを導き出すことに成功するのだが，例えばデュパンは，二つの窓が逃走経路だと推測し，力ずくでは開けられない窓が隠しバネによって持ち上がることと，窓の内側から打ち付けられた釘の状態から警察が気付けなかった密室のトリックに気付いたのだ。そして彼は消去法とそれ以前に起きた事件との繋がりから，この密室殺人の意外な犯人を突き止める。

優秀賞

こうして，デュパンは難事件を解決することができたのだが，彼の見事な推理力を際立たせているのがデュパンの同居人だという本作の語り手でもある“わたし”である。作中では，デュパンの発言の多くは語り手を通して読者に伝えられるのだが，語り手は冒頭部分で難しいことを熱く語り，いかにも自分の頭が良いことを示すかのようである。その明晰な“わたし”が語る話としてデュパンの事件解決の信憑性を高め，彼の非凡な才能を強調することになる。語り手はデュパンと常に行動を共にしており，折に触れてデュパンの才能を伝える。例えばデュパンは観察というゲームが得意で，常に色々な人や状況を観察しており，作中ではデュパンが推理をしたうえで，語り手が何を考えているのかを見事に当ててしまうという場面がある。このようにして語り手は，デュパンが事件のことでなくとも鋭い推理力を発揮することを伝えるのだ。

しかし語り手の役割はこれで終わりではない。そもそも読者と語り手，デュパンそれぞれの間で持っている情報量が異なるため，理解にズレが生じてくる。語り手はデュパンから得た情報を私たちに教えてくれるデータベースになっているのだが，彼も全容を知っているわけではない。このようにして天才デュパンの頭の中の考えを隠すことで，サスペンス性が高まるのである。しかし，読者が詳細を把握しきれないまま，事件だけが解決してしまってはどこか気持ち悪い。そこを語り手が埋めていくのだが，この語り手の時間稼ぎのようなものが，結末のデュパンの鮮やかな謎解きの効果を高めているのだ。要は，最後に読者と登場人物の持っている情報がすべてつながれば良いわけだ。この語り手はまさにデュパンの一部であって，お互いが補い合っていると言える。デュパンが観察というゲームが得意であるのに対して，語り手は物事を伝えるのが得意である。この組み合わせによって名探偵デュパンが誕生したのである。

『モルグ街の殺人』を読むと，推理小説における語り手がいかに重要な役割を果たすか，またその性質によって作品の味が大きく変わってくるかということが分かる。『モルグ街の殺人』の語り手は推理小説誕生，名探偵誕生に大きく貢献した立役者といえる。この語り手の役割を『シャーロック・ホームズ』ではワトソンという相棒が担うことになる。世界で初めての推理小説には後の小説家に影響を与える要素が凝縮しているのだ。

選考委員による講評　　**選考委員代表　コンピュータ理工学部教員　林原　尚浩**

シャーロック・ホームズやエルキュール・ポアロといえば，世界的な人気を博した推理小説を思い浮かべるが，このようなスタイルの推理小説を遡っていくと『モルグ街の殺人』に行き着く。この著作は世界初の推理小説であると同時に，密室殺人というミステリーの王道を確立したものでもあると言われている。

書評では，読者，語り手，名探偵デュパンという３人について「情報量」という観点から興味深い考察が展開されている。読者はデュパンの視点から見た情報を語り手をとおして伝え聞いて推理を深めていくが，読み進めることによる３者の情報量の変化によって推理小説の面白さが決まる。書評の簡潔性もさることながら，語り手の重要性という視点を与えた点を評価したい。

入賞者から一言

今回初めて書評に挑戦したことで，なぜ推理小説が面白いのかを考えることができて良かったです。また優秀賞に選出していただいたことを嬉しく思います。

最後に，ご指導いただいた中西先生と，アイデアを沢山くれたゼミの仲間たちには本当に感謝しています。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

外国語学部　２年次生

上村 友子（こうむら ともこ）

書 名 ： 『ミッキーマウスの憂鬱』

著 者 ： 松岡圭祐

出版社・出版年 ： 新潮社 ， 2008

「 煌きの裏側には 」

世界中の誰もが知る巨大テーマパーク，ディズニーランド。人々は日常とかけ離れた世界に夢を抱き，恋い焦がれる。ミッキーマウスといえば，そこの一大有名人である。そんな夢に溢れた代名詞の後ろに，憂鬱と置くのだ。インパクトのある題名に目を惹かれた。

ディズニーランドを舞台にした松岡圭佑さんの青春成長小説。2008 年に発表され，2009 年度の「新潮文庫の 100 冊」に選ばれた。主人公は 21 歳の後藤大輔。彼もまた夢の世界に恋をする，ディズニーランド大好き人間である。そんな彼が派遣社員として，ディズニーランドで働くことになる。だが，ワクワクしたのもつかの間，ディズニーランドの裏側，「夢の世界の現実」を知り，落胆する。与えられた仕事は，着ぐるみの着付けをするだけという単純作業。やりがいを感じられない。パレードが中止になると喜ぶキャストがいる。さらに正社員と派遣社員との間での扱いの違いから確執めいたものが表面化し，苛立ちを覚えるのだった。そんな中，ミッキーマウスの着ぐるみの頭部分が紛失するという事件が起きる。後藤は，派遣社員だからという理由で事件の犯人に仕立てあげられようとしている同僚を救おうと奮起する。話が展開するにつれて，周りの人々が後藤に感化され，後藤自身も成長していくというストーリーだ。

「ゲストのためにディズニーランドは存在するけど，それを維持しているのは会社の偉い人でもなければ，スポンサーでもない。わたしたち」「わたしたちがいなきゃ，この世界の幻想は守れない」。物語終盤に出てくるこのセリフに，作者の松岡さんが伝えたいメッセージが込められている。どんな世界にも「裏側」が存在する。ディズニーランドだけではない。テレビだって，もっと身近なところで言えば，学校の学園祭だってそうである。きらびやかな世界があるのと同時に，一見すると地味なバックヤードがある。しかし縁の下の力持ちがいなければ，舞台は成立しないのだ。

「倉庫のように雑然とした部屋のなか，二段になった棚に，ミッキーマウスの頭部がいくつも並んでいた」。後藤が初めてミッキーマウスの着ぐるみを見たときの描写である。歩けば人に囲まれ，写真を撮るのに長蛇の列ができる。そんな夢の世界の住人の頭部が棚に

いくつも並べられているのだ。嫌でも分かってしまう。ディズニーランドは外から見るほど単純な夢の世界ではない。人々が憧れる夢の世界が実際はそうではないと了解した上で，その幻想を守ろうとする裏方がいて初めて，夢の世界は成立する。

普段，私たちが目にするのは表舞台である。私もアルバイトで接客業をしている。「私，客なんだからもてなせよ。早く」みたいな態度の「お客様」が少なからずいる。もちろんこちらもお金をもらって働いているのだから文句は言えないが，私たちがいなければ店は成立しないことを分かってほしいと思ったりする。その人もきっとどこかで働いていて，何かを支えているんだろうに，と思うと少し悲しい。その人は自らの仕事で同じような経験をしたことがないのだろうか，と。

人は自分が表舞台にいることを忘れがちだ。裏で誰かを支える仕事をしていても，表舞台に立った瞬間，思いやりを欠く。駅の公衆便所が綺麗なのは当たり前。レストランで料理が綺麗に盛り付けられて出てくるのは当たり前。ではなく，裏で掃除してくれる人がいるから，調理してくれる人がいるからこそ，その当たり前が成立する。支えている人々がいるから，日常という表舞台が成立するのだ。そのことを心に留めて，感謝し，日々を過ごしたいと思わせてくれる物語である。

この小説を読んだ印象としては，読みやすい。この一点に尽きる。ディズニーランドの裏側，ドロドロした部分を描いたものではあるが，文章自体は軽くどんどん読み進められる。難点を挙げるとすれば，主人公のキャラクター。どこかイラッとくる。まっすぐな好青年なのだが，そのまっすぐさ故にいつも空回りしてしまう。しかし読み進めるうちにそのイラッと感も解消され，全体としては高評価だ。いつでも気楽にサクッと読める小説。ただしディズニーランドに行く前以外をお勧めする。

選考委員による講評　　**選考委員代表　現代社会学部教員　鈴木　康久**

「ミッキーマウス」と「ディズニーランド」。誰もが「イメージ」することができる素材を通して，社会の表舞台と裏側について考えることを促す書評である。最初にストーリーを簡潔に記した上で，作者の「わたしたちがいなきゃこの世界の幻想は守れない」とのメッセージを伝え，その後に評者の興味や体験で筆者のメッセージを補強している。最後に少しだけネガティブ要素を入れている点も心憎い。文体を工夫し，独自のリズムをつくるなど，細部に至るまで読み手を意識しているように感じる。

書籍等の販売額は 1996 年をピークに 20 年以上も長期低落傾向が続いており，出版社の方と話をしても，新著に対してよい返事がないのが現状である。評者のような従来の文体に囚われない，読みやすさが求められているのかもしれない。

入賞者から一言

受賞のご連絡をいただき大変驚いております。準備不足で納得のいくものではなかったのですが，それでも賞を頂けたのは，メディア・コミュニケーション専攻の仲間たちと日々文章を磨いたこと，先生方のご指導の賜物だと感じています。

来年は早め早めを心がけて，更に尽力いたします。ありがとうございました。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

経済学部　３年次生

嶋田（しまだ）　裕一（ゆういち）

書 名 ： 『空飛ぶ広報室』

著 者 ： 有川浩

出版社・出版年 ： 幻冬舎 ， 2016

「 理解への認識 」

「不慮の事故で P 免に。夢断たれた若き戦闘機パイロットの今」と，表紙に書かれている本を見つけ，手に取った。タイトルは『空飛ぶ広報室』。表紙のデザインが新聞の記事のようになっており，最初に書いた文章が新聞の見出しとして配置されていた。この文章とタイトルに興味を持ち，私は本書を読み始めた。

この作品は，航空自衛隊の戦闘機パイロットである空井大祐（そらいだいすけ）が不慮の事故に遭ってしまい，ブルーインパルスに入るという夢を絶たれたところから始まる。事故によりパイロット生命を絶たれた空井は航空幕僚監部広報室に異動となり，広報官としてテレビ局のディレクターの稲葉リカと仕事をしていくことになる。しかし，空井は同じ自衛隊でも全く仕事内容が異なるパイロットと広報官の違いに戸惑うことになったり，稲葉を始めとする自衛隊への偏見を肌で感じるなど苦労することとなる。その後テレビドラマへの協力など仕事を通じて，空井と稲葉はお互いのことを理解していく。また，空井以外の広報室のメンバーにも悩みがあり，それぞれの広報官の視点からも物語を読むことができる。

この作品の登場人物の悩みには，共通している点がある。それは「相手を理解できていない」という点である。例えば，幹部自衛官である片山は，広報官として尊敬している比嘉が幹部選抜を受けないことに志が低いと感じ，比嘉に対して意地を張った態度をとっていた。しかし，比嘉が幹部選抜を受けない理由が，転勤の多い幹部では行えない長い期間が必要な企画を行ったり，引き継いだりするためだと片山は知り，比嘉と和解した。このように，相手のことを理解できていないためすれ違いが起きたり，周りから理解されないことで苦しむ登場人物が理解するもしくは理解してもらうための過程がこの作品では描かれている。また，作中では「広報は自衛隊を理解してもらうために存在してる」とあり，この作品が人の理解についてテーマにしていることがわかる。

私達は日頃，物事や人を偏見や先入観で見てしまうことがあると思う。よく知りもしないものに対して良し悪しを勝手に判断したり，ニュース番組に出演しているコメンテー

ターの意見を鵜呑みにしてしまう。また，SNS が普及したことで個人が自由に意見を発信することができるようになり，読む他人の気持ちを考えないで情報や意見を発信したり，誰かの意見を理解しないで批判することもある。しかし，本書を読むことで「理解」することや「理解」してもらうことの難しさを知ると同時に大切さや素晴らしさを感じることができる。理解することで今まで見えなかったものが見えるようになる。この作品でも，自衛隊に対して悪い印象を持っていた稲葉が広報官の空井を通して自衛隊について理解していく様子が描かれている。その理解していく過程で，稲葉は空井や広報室のメンバーとぶつかったり，すれ違うことがあったが，理解する前より成長することができた。

次に，この作品の最大の魅力はリアリティーである。著者は実際に航空幕僚監部広報室を取材しており，物語に登場する人物の内二人は当時の広報官をモデルとしている。そのため，登場人物がまるで現実に存在しているかのように感じられ，起きている出来事も自分のことに置き換えて考えることができる。また，2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で被災した航空自衛隊松島基地を取材して書かれた『あの日の松島』という話がある。この話では東日本大震災で災害救助活動をした自衛官達のありのままの思いや自衛官から見た当時の状況が語られており，テレビの報道だけでは知ることのできなかったことが書かれている。「あとがき」で著者は「『あの日の松島』では，稲葉リカにそんな彼らをただ見てきてもらうことにしました。皆さんに等身大の彼らが届くことを祈っています」と述べている。このことからも著者がリアリティーにこだわっていることが分かる。

最後に作中で空井は「広報っていう仕事は，航空自衛隊を飛ばすことができるんです。―世間の風に」と言っている。この作品では，不慮の事故に遭い突然夢を絶たれた空井大祐が，もがき苦しみながらも新しい道へ進んでいく姿が描かれている。本書は，私たちが思い悩み立ち止まってしまった時に，指針となる存在である。

選考委員による講評　　**選考委員代表　現代社会学部教員　鈴木　康久**

『空飛ぶ広報室』は 2013 年に TBS テレビでドラマ化された有川浩氏の人気作品である。書評の最初に「タイトルに興味をもった」とあるように，広報とは何かを中心に据え，主人公の行動や SNS で繋がる社会，自衛官の現実などを通して評者の広報への素直な思いを表現している。書評で広報とは理解を促すためのツールであり，そのために大切なことは事実を表現すること。最後に主人公の言葉で「広報には社会を動かす力がある」との自らの結論を述べている。

これまでに何度か職員の採用面接をしてきた経験がある。その際に大切にしている指標の一つが「伸びしろ」である。物事を素直に捉えることは，社会に出てから伸びるための大きな要素だと考えている。これからも自分の興味に応じて，素直な気持ちで多くの書籍を読み込んでもらいたい。

入賞者から一言

今回の受賞はとても驚きました。応募にあたり，過去の受賞作品を読みましたが，素晴らしい作品ばかりでした。そのような賞を頂くことができたことがとても嬉しいです。今後も読書のみならず，日常生活で感じた感動を表現していく努力を続けたいと思います。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　２年次生

高澤（たかざわ）　樹（たつき）

書 名 ： 『偉大なる、しゅららぼん』

著 者 ： 万城目学

出版社・出版年 ： 集英社 ， 2013

「万城目学の面白くも神秘的な世界」

万城目学の小説といえば『鴨川ホルモー』や『鹿男あをによし』など，奇想天外なタイトルが多いが,『偉大なる、しゅららぼん』も風変わりなタイトルである。「しゅららぼん」とは何なのだろうか。この物語は琵琶湖から不思議な能力を授けられた湖の民，日出家と棗（なつめ）家という二つの一族のライバル対決を描く。両家がそれぞれ力を使うと，相手側に耳障りな音が聞こえるという特性がある。両家が同時に力を発揮した時に聞こえる音，そしてそのときに発生する強烈な力の名称が「しゅららぼん」なのである。

日出家の持つ能力は相手の精神を操る力である。一方，棗家が持つ能力は相手の肉体を操る力である。しかし，先述の特性によりお互いが自由に力を使用することができないうえ，力を持つ者には効果がない。思うままに力を扱えるようにするために，それぞれが相手に滋賀県から出ていってほしいと思っている。これが，両家が対立している理由である。強い権力を持つ日出家は権力を駆使して棗家を追い出そうとするが，棗家が応じない。そこでお互いが関わり合いにならないように，当局などに働きかけたりする。しかし，高校の手違いにより，物語の主人公である涼介や，同じく日出家の淡十郎，そして棗家の広海が同じクラスになってしまったことにより，両家の対立問題は一気に加速していくことになる。涼介がこの対立や周囲の人間に振り回されながら学園生活を送っていく中で，両家の存続そのものが怪しくなる事件が発生し，全員でその解決に奔走することになる。

この万城目学の神秘的で面白い物語世界を演出するのは曲者（くせもの）ぞろいの登場人物である。日出家本家の出身の淡十郎は，権力に物を言わせて，自分が気に入らない相手や喧嘩を売ってくる者にはありとあらゆる手段を使って報復をするような人間である。淡十郎と対照的なのが，冷静沈着な広海である。この２人の大きなギャップがそれぞれの個性を際立たせている。また，琵琶湖の力が強すぎるあまり人との交流を断っている淡十郎の姉清子，涼介たちの師匠である濤子（とうこ），涼介たちの様々な世話をする源爺といった日出家の人々。一連の事件の首謀者である石走（いわばしり）藩主の子孫である涼介達の通う高校の校長と，その娘である

速瀬など個性的かつ魅力的な人物が多数登場し，この物語の多想的なプロットを構築していく。

もう一つこの作品を面白くしているのが，涼介の一人称による語りである。つまり，涼介が知らないことは読者にも分からないのである。たとえば，物語の序盤で日出一族には特殊な力が与えられており，涼介にもその力が備わっていること以外，読者には情報が示されないが，これは涼介自身がそれ以外の知識を持っていないからである。また，涼介が事情をよく理解していないことが物語の展開で様々に作用する。たとえば，物語上で起きる事件や出来事について涼介だけが理解できていない，または勘違いをしたまま行動を起こす，といった状況がたびたび発生する。後に真相が判明したり，最後まで謎だったりするが，それまでは読者にも勘違いさせたまま話を読み進めさせる。こうすることにより，読者にミスリードを誘い，涼介の誤解が生み出す様々なアイロニーに読者を巻き込むことで，読者に涼介の体験や感情を臨場感たっぷりに体験させることができる。このように，涼介の一人称の語りは物語の中で真相が明らかになった時の読者の驚きを大きくさせる効果があるのだ。

作中に出てくる謎の真相が必ずしも深いものではないため，ものによっては驚きよりもおかしさの方が上回るかもしれない。特に「しゅららぼん」の音と力の正体は脱力すること請け合いである。古くに琵琶湖から授かった力を持った二つの一族の和解の結末はどこか切ない。それぞれの一族の最後の決意はいがみ合っていた両家の唯一の歩み寄りである。ぜひこの万城目学の神秘的で不思議な世界に入って，涼介の体験したこの物語を味わってみてほしい。きっと多くの驚きと笑いがあなたを迎えるだろう。

選考委員による講評　　**選考委員代表　法学部教員　若狭　愛子**

本作の著者，万城目学氏は大阪出身，京都大学法学部の卒業生である。彼の作品は関西地方を舞台にしていることで有名であり，2009 年に京都を舞台にしたデビュー作の『鴨川ホルモー』，次いで 2011 年に大阪を舞台にした『プリンセス・トヨトミ』，そして 2014 年に琵琶湖を舞台にした本作が映画化されている。関西出身または関西在住の者には親しみやすい舞台設定であろう。また，本作の主人公は高校生であり，人を操る力を行使できたり，主人公の居所が城であるなどのいくつか特異な点はあるが，日々の高校生活の描写や登場人物の言動は，評者や多くの学生にとってなじみ深いものではないかと推察する。残念ながら，選考委員の私が学生だったのは随分と昔のことで，主人公たちに感情移入するのはなかなか難しく，懐かしく感じる場面の方が多かったが。

さて，本書評は，ストーリーを簡潔に表した後，客観的に本作の魅力を紹介しようと努めており，また長文ではなく短文を用いて，本作の未読者であっても作品の内容・評者の本作への批評が理解できるようにまとめられていたことも評価できた。

入賞者から一言

ナンセンスな作風の作品であったため，非常に難産な書評となってしまったのですが，こうして賞をいただけて光栄に思います。改めて自分の書いたものを読み直すと満足できるような出来ではないので，また機会があればリベンジしたいと思います。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

文化学部　4 年次生

筒井（つつい） 茉衣（まい）

書 名 ： 『アンパンマンの遺書』

著 者 ： やなせたかし

出版社・出版年 ： 岩波書店 ， 2013

「 アンパンマンの遺書 」

「なんのために生まれて　なにをして生きるのか」これは，アニメ「それいけ！アンパンマン」のテーマソングのフレーズである。丸顔の愛と勇気だけが友達のヒーロー，アンパンマンを知らない人はほとんどいないだろう。多くの子どもたちがその姿を愛し，貧しい者に自身の顔を分け与える姿から優しさを学ぶ。アンパンマンの生みの親，やなせたかし氏は 1919 年，高知県の小さな村に生まれ，2013 年にこの世を去った。本書は，やなせ氏の人生が幼少期からふりかえられ，アンパンマンを通して，今何のために生きているのか，自身の人生についても考えさせられる 1 冊である。

やなせたかし氏は戦前・戦中・戦後と激動の時代を生きた。太平洋戦争の時には，九州の野戦重砲隊に入隊した。毎日，重い鉄砲を担いで人殺しの訓練をさせられ，日本の戦争は聖戦で，正義の戦いなのだと教えられた。やなせ氏は，正義のために戦うのだから，生命をすてるのも仕方ない，と考えていたと言う。ところが，戦争が終わり正義のための戦いなどどこにもなかったことを知る。この体験はアンパンマンの原点となった。世間一般には，アンパンマンの正義とは，ばいきんまんを倒すことだと認識されているが，そうではない。では，「正義」とは一体何なのか。やなせ氏の考える正義とは献身と愛である。それも決して大げさなことではなく，目の前で餓死しそうな人がいるとすれば，その人に一片のパンを与えること。これがアンパンマンの誕生である。正義のヒーローとは，強い敵にたった一人で立ち向かったり，地球を救ったりしている人物という認識である。そういった人物には私たちは簡単になれないが，目の前の苦しんでいる人に手を差しのべることはできるのではないだろうか。もしかすると，私たちは無意識に正義のヒーローになっているのかもしれない。

やなせ氏がアンパンマンの中で一番描きたかったところは，アンパンチをしてばいきんまんを倒すところでも，町のみんなのためにパトロールをしているところでもない。顔を食べさせて顔が無くなってしまったアンパンマンが空を飛ぶところである。それもエネルギーを使い切ってしまって失速していく場面である。さらには，はじめて絵本に登場したアンパンマンは，やけこげだらけのボロボロのマントをまとっていた。やなせ氏はそういったアンパンマンの姿を描くことによって，ただかっこいいだけのヒーローではなく，自

分を犠牲にすることや，やなせ氏が考える正義を多くの子どもたちに伝えたかったのであろう。この絵本のあとがきには「子どもたちとおんなじに，ぼくもスーパーマンや仮面ものが大好きなのですが，いつもふしぎにおもうのは，大格闘しても着ているものが破れないし汚れない，だれのためにたたかっているのか，よくわからないということです。ほんとうの正義というものは，けっしてかっこうのいいものではないし，そして，そのためにかならず自分も深く傷つくものです。」と記されている。戦争の体験を経て，自分の信じてきた正義が，実は全くの別物だったことを知らされたやなせ氏だからこそ，こういったヒーローが生まれたのであろう。確かにアンパンマンは他のヒーローと違って，格好いい姿に変身するわけでも，特別な能力を使うわけでもない。彼が持っているのは，目の前の苦しんでいる人をほうっておけないという優しさだけなのである。

アンパンマンのストーリーの中では，時折，お腹をすかせたばいきんまんにアンパンマンが自身の顔を食べさせるという描写も見られる。視聴者の中には，ほうっておけばいいのに，と思う者もいるだろう。その感覚は現代を生きている私たちにとっては当たり前のものかもしれない。確かに，やなせ氏の言う，正義とは愛と献身である，というのは間違いではないが，世の中そんなことばかり言っていられないというのも正直なところだ。

「なんのために生まれて　なにをして生きるのか　わからないままおわる　そんなのはいやだ！」アンパンマンのテーマソングは幼児アニメーションのテーマソングとしては重い問いかけになっている。自分が何のために生まれて，何をして生きるのか，今すぐ明確に答えが出せる人というのは滅多にいないだろう。『アンパンマンの遺書』はアンパンマンを通して，自分自身の存在意義を考えてほしい，これから何をしたいか自分に問いかけてほしい，というメッセージが伝わる作品である。本のタイトルを『やなせたかしの遺書』とせず，『アンパンマンの遺書』としたのも，自分の人生においての「正義」とは何かを特に考えさせたかったのではないだろうか。アンパンマン自体は幼児を対象としているが，この作品は大人になったみなさんに，特に自分はなぜ生きているのか，その答えを知りたい人にぜひ読んでほしい。

選考委員による講評　　**選考委員代表　現代社会学部教員　鈴木　康久**

繰り返すことで筆者の想いを伝えようとする書評で，とても読みやすく評者の世界に入ることができる。評者は，やなせ氏が一番描きたかった部分を「顔を食べさせて顔が無くなってしまったアンパンマンが空を飛ぶところである。それもエネルギーを使い切ってしまって失速していく場面である」として，このメッセージを何度も場面を変えて表現している。最後に『やなせたかしの遺書』とせずに『アンパンマンの遺書』としたことを，人生においての「正義」でまとめている部分も同様である。これまでに書籍を発刊できる何度かの機会にも恵まれ，そろそろ残された時間を意識する年齢になったが，「遺書」を書名にすることはできない。『アンパンマンの遺書』は 75 年の歳を重ねられた筆者が，想いを込められた一冊であろう。何十年後かに，学生時代を思い出しながら読み返して欲しい。

入賞者から一言

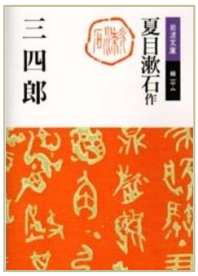
２年続けて選んでもらえると思わなかったので，とても嬉しく思います。私の書評をきっかけに，『アンパンマンの遺書』が多くの人に読まれ，愛されてほしいです。今年卒業するので，来年はもうありませんが，これからも様々な本にふれていきたいです。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞

佳　作

経済学部　３年次生

林（はやし）　海秀（かいしゅう）



書 名 ： 『三四郎』

著 者 ： 夏目漱石

出版社・出版年 ： 岩波書店 ， 1990

「 孤独な青年の像 」

私が高校生のころ，夏目漱石の『三四郎』を初めて読んだとき，私は主人公の小川三四郎が東京で経験する生活に淡い憧れを抱いていた。それは，この小説の登場人物たちの生きる世界の，どこか世俗を突き放すような知的な雰囲気に気をとられて，三四郎と周囲の人々との間に開いた距離が認識できなかったためであろう。漱石生誕 150 周年の今年，三四郎と同じ大学生になって読み返すと，そこに憧れは消え失せて，三四郎という孤独な青年の像が浮かんできた。この機会に三四郎の孤独に向き合いたい。

『三四郎』は，1908 年（明治 41 年）に書かれた漱石 41 歳による長編小説であり，『それから』『門』とともに初期三部作の一つとして数えられることでも有名である。主人公の三四郎は，東京帝国大学に入学するため，熊本から東京へ向かう汽車に乗る。途中，汽車で会った女と名古屋で同衾（どうきん）事件に巻き込まれたり，高校教師の広田先生と会話し自分自身の見識の狭さに気づかされたりと衝撃を受ける。東京にきて，三四郎は池のほとりで見た里見美禰子（みねこ）に一目惚れする。彼女の「迷える子（ストレイシープ）」という言葉に謎めいた魅力を感じるが，三四郎は美禰子と若い物理学者・野々宮との関係を察することができない。結局，美禰子は野々宮もおいて兄の友人の男と結婚する。三四郎は画家の原口が書いた美禰子の絵を観て懐かしむことしかできなかった。以上が『三四郎』のあらすじである。

青年は他者との生命力をもった交わりのなかで，他者を鏡にしてはじめて自己の存在価値を発見する。三四郎は，感情を表に出してコミュニケーションを交わすことのできる他者をもたない。彼が行動をともにすることの多い学友の佐々木与次郎でさえも，それには役不足である。三四郎は与次郎との会話で受け身にまわることがほとんどであり，与次郎の溌剌さに圧倒され返事すらできないことも多い。よって，三四郎は自己の存在価値を根本的には認識することができない。美禰子との恋愛でも三四郎は，野々宮と自分を比べて自己嫌悪せざるをえない。「自分は田舎から出て大学へ這入ったばかりである。学問という学問もなければ，見識という見識もない。自分が，野々宮に対するほどな尊敬を美禰子から受け得ないのは当然である」。そして，三四郎は醜い自分を否認し隠そうとする。

三四郎は，自分の存在価値を一時的にでも感じようと，自分はエリートであって他者より優れていると意識する。三四郎が卒業した熊本の高等学校のモデルは，九州の名門・旧

制五高だと言われている。名門校を卒業し，東京帝大に進学する三四郎はたしかにエリートであろう。東京へ向かう汽車の中で三四郎は，卒業した高等学校の帽子をずっと被っている。この帽子は三四郎のエリートたる証明なのである。同衾事件の女には帽子の意味を気づいてもらえず残念に思い，広田先生には気づいてもらうも期待したような尊敬を得ることができない。いくら輝かしい学歴も本人の存在価値とは直接には関係しない。ゆえに，三四郎の自己承認の欲求は失敗に至らざるを得ない。

孤独な三四郎は理想的な対象に自己を同一化しようとする。東京という慣れない環境に置かれ，三四郎は半ばノイローゼ状態になる。そんななかで三四郎は野々宮に会う。研究室の穴倉で実験に没頭する野々宮に三四郎は感銘を受けたのだろう。同じ日に聞いた，野々宮の見事な建築物の評論を，三四郎は後日になって真似をしてみて「初手から自分の持説である様な気」になる。また物語中盤では，学生親睦会である学生が，自分たちは古い日本も，西洋も越えるべき「新時代の青年」だと大げさな演説する。三四郎は「尤(もっと)も熱心なる喝采者の一人」として受けとめる。三四郎は自分も「新時代の青年」の一人だと意識して，価値ある自己を確認しようするのである。三四郎は，前者では野々宮に，後者では「新時代の青年」に自己を同一化し，心に空いた穴を埋めようする。

『三四郎』が書かれた 1908 年というのは，日本が西洋に負けない資本主義国を目指して激しく成長し，ついに日露戦争に勝利するまでになった直後の時代であった。資本主義の発展は人と人との競争を加速させる。競争は人と人との間に対立をつくり，人間は温かいコミュニケーションから切り離される。東京帝大といういわば競争の最前線にあって，三四郎は自己の存在価値を発見できずに孤独をうちに秘めたまま生きている。三四郎の孤独は明治の日本に限ったものでないだろう。現代の日本では，さらに「自己責任」ということが盛んに言われ，人々はますます寄る辺ない孤独の淵に追い詰められている。『三四郎』が今も読まれるわけは，現代を生きる人々の孤独さえも反映するリアリズムにある。日本が冷たい競争原理から自由にならない限りは読み続けられるだろうと私は考える。

選考委員による講評　　**選考委員代表　コンピュータ理工学部教員　林原　尚浩**

『三四郎』,『それから』,『門』といえば夏目漱石の前期三部作であるが，本書では九州から上京した若者の苦悩，不安，享楽が「郷里」,「大学での学問」そして「恋愛」の３つの要素により描き出されている。物語の最後で三四郎がつぶやく迷羊（ストレイシープ）が，日露戦争後のある種の高揚感がある東京で，失恋した彼の孤独感を表している。

時代背景から伺える三四郎の孤独感とそれを埋めるための自己承認欲求と自身の憧れへの同一化を図る部分について，本書評では焦点をあてている。

加速する情報化社会，グローバル化，東京オリンピックへの期待と高揚感。様々な点で現在の我々を取り巻く環境と共通点がある。評者も等身大の大学生の物語として主人公の感情を読み取ることができているように思える。

今だからこそ改めてこの名作を読み返してみようと思わせる書評である。

入賞者から一言

入賞のお知らせをいただいて改めて自分が書いたものを読んでみると，まるで乱暴に書きなぐったようだし，チグハグなところもあり恥ずかしいところです。それでも，“『三四郎』は今の学生が読んだって面白いんだぞ”という熱だけでも感じていただければ幸いです。よく読んで，読み手として成長したいと思います。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞　アンケートと統計

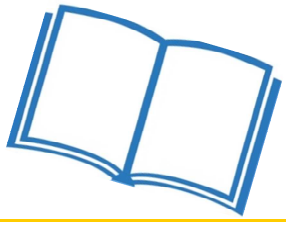
アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1）なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 昨年も応募し、また挑戦したいと感じたから。
- 授業でビブリオバトルをしてもっとこの本をたくさんの人に知ってほしいと思ったから。
- ゼミの課題に書評が課され、ちょうどよい機会だと思い応募しました。
- 講演会に出席して、書評を書くことに興味を持ったから。
- 自分の文章力を試したかったから。

Q2）書評の対象図書をどのようにして選びましたか。（最もあてはまるもの１つ）

- 興味のある分野だから　28 人
- 先生からの推薦・指示　2 人
- 好きな作家だから　14 人
- 図書館で見つけたから　7 人
- 話題の本だから　6 人
- その他　5 人



Q3）次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」（49 人）（理由）

- 難しく考えていたが意外に楽しんで書くことができたから。
- 本を読む良いきっかけになるから。
- 好きな本を、改めて様々な面から見直すことができるから。
- 今回は、準備期間が短く、本の選択、書評の内容ともに自分では納得のいかないものになりました。来年は、しっかり準備をして臨みたいです。

「いいえ。」（25 人）（理由）

- 1,600 字はきつかった。
- 卒業しているため。
- 来年は就活生なので余裕があるかわからないから。

Q4）執筆してみての感想や，提出方法など，お気づきの点を自由にご記入ください。

- 冒頭部分や文章の構成など難しかったが、自分の力になってよかった。
- 書評を執筆することで、自分の対象図書に対する曖昧なイメージをしっかりと整理する時間ができた。
- 今までより、より本と真剣に向き合うことができた。
- 少ない文字数で人に何かを伝えるということは、多くの文字数で語るよりも難しいことですが、文章を簡潔に作成する何よりの練習になると思いました。読書感想文ではなくて書評を執筆するというのもまた、貴重な経験になると思います。
- 意外とすぐに指定文字数まで到達したので文字数調整が少し大変だった。あと、複数冊で完結する小説の場合の提出方法が書いてなかったので少し困りました。

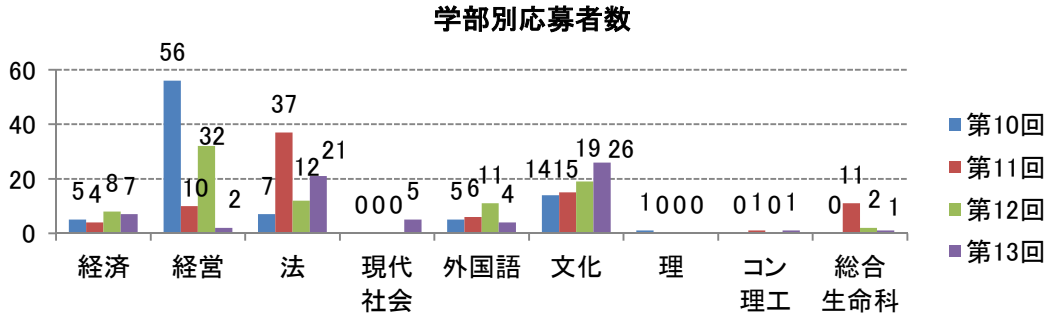
Q5）毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

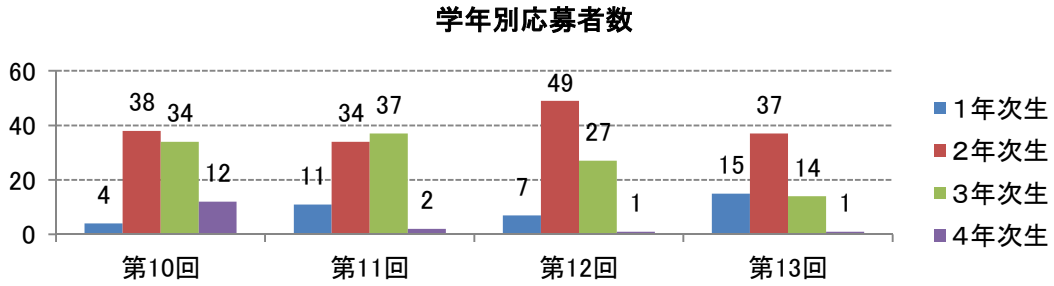
- 今年行われた（羽田圭介氏）講演会に参加してみてとても面白かったので、来年も今年のような作家の方による書評大賞に役立つ内容のものを希望する。
- 若者たちが興味を持つゲストなどを招待していただきたいと思います。
- その年で話題になった人を呼んでいただきたいです。

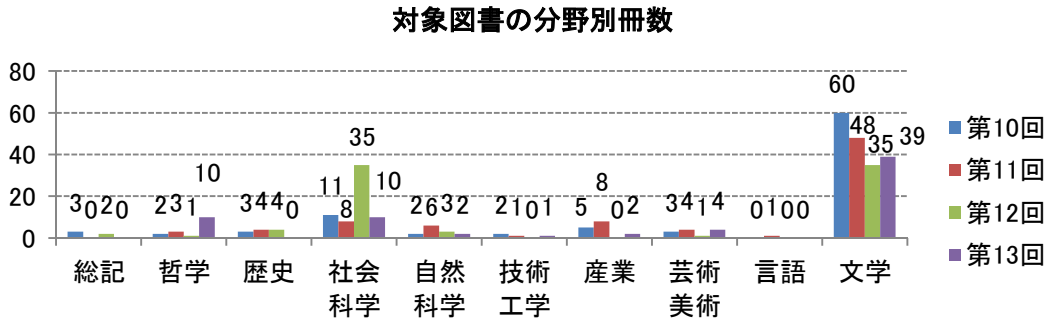
－ 希望する講演会講師（敬称略・五十音順）－

住野よる・東野圭吾・三浦しをん・森見登美彦・山田詠美

統計はこちらです。







今回の応募者数は67名で前回から17名の減少となりました。学部別応募者数は文化学部・法学部・経済学部の順となり，新設の現代社会学部からの応募があった一方で，経営学部が大幅に減少しました。全体的に文系学部学生からの応募が多く，理系学部学生からの応募が少ない傾向は続いていますが，読解力や表現力は文系・理系問わず必要ですので，積極的にチャレンジしてください。

学年別応募者数は，例年どおり２年次生が多い傾向ですが，１年次生からは15名の応募がありました。２回・３回と続けて応募することによって文章力を向上させ，入賞に至っている学生もいます。

対象図書の分野別冊数では，文学と社会科学，哲学に関する資料の選択が多い一方，総記，歴史，言語に関する資料の選択が０となりましたが，昨年応募のなかった技術・工学，産業に関する資料の選択がありました。教員からの推薦がきっかけで応募された方が多いものの，応募者は，自らの興味・関心で対象図書を選択している傾向が窺えます。対象となる本は「図書館の蔵書」全体です。次年度もこれまで手に取ることが少なかった本でチャレンジするなど，多様な分野からの応募作品をお待ちしています。

第 13 回 京都産業大学図書館書評大賞 概要

目的

(1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け，読書活動が推進され，結果として図書館利用を促進する。
(2) 興味ある著作を読みこなし，内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は，図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力，文章表現能力を向上させ，レポート・論文作成能力，情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領（抜粋）

1. 応募資格　京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
   (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
   (2) 文字数：1篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。応募原稿様式は図書館 Web サイトから入手(マイクロソフト社 Word ファイル)。
   (3) 応募作品は本人のオリジナルであり，かつ未発表であること(盗用厳禁)。
   (4) その他：1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

67 名 68 篇

実施日程

応募期間：平成29年７月３日（月）～ ９月４日（月）
入選発表：平成29年11月24日（金）
表 彰 式：平成29年12月20日（水）

選考委員より ひとこと

「書評とは何か」。選考委員の方々による講評の中に多くのヒントをいただきました。応募者も様々な想いで，手にした書籍を表現されたと思います。「書籍に興味を持って欲しい」，「筆者のメッセージは」などなど。それぞれの想いを大切に，これからも大好きな一冊を手にして欲しいと願っています。（鈴木）

さまざまなジャンルの本の書評を読ませて頂きましたが，受賞対象となった書評については，どれも内容の理解，独自の視点における評価，自身の主張を伝える論理構成が優れたものであったと思います。常に書評を書くことを意識しながら本を読むことによって，よりオリジナリティのある切り口での解釈につながるような気がしました。（林原）

以前，選考委員をやった時には，ほとんどの作品が読書感想文の域を出ないものでした。今回，約 10 年ぶりに選考委員をやり，作品の質の高さにうれしい驚きを感じました。何事も継続は力なんですね。（箕輪）

普段目にする書評は専門書に関するものがほとんどなので，今回，選考委員として新鮮な気持ちで書評を読むことができました。実際に作品を読んでみたいと感じた書評もたくさんあり，慌ただしいながらも楽しい作業でした。（若狭）

みなさんの作品を読んで，表現力のスゴさに圧倒されました。選考するより，対象となった作品を読んでみたいという気持ちになりました。それは作品が単なる感想文ではなく書評たり得ているということだと感じました。（天笠）

対象図書に対する深い読み，応募作品の表現力の豊かさが表れた力作に向き合える喜びを感じながら拝読しました。学生のみなさんは，同年代の人がどのような本を読みどのように評価したのか，自分はどのような感想を持つのか，対比してみるのも良い経験になるかと思います。（今井）

２次選考に進んだ中には，対象図書への想い入れが強く感じられたり，上手いなぁと感心させられる作品が多くありました。紹介やお薦めに留まらず批評する視点を加味すると，さらに厚みのある書評になるのではないでしょうか。次回も多数の応募を期待しています。（中上）

応募作品を読んでいると，ぐっと心に響くもの，読んでみたいなと思うものが多くありました。皆さんが，名作から，小説，思想と幅広い作品に親しんでいる様子がうかがわれます。次回の応募作品も楽しみです。（真部）

今回の書評大賞で応募された書評は，良作が多く，選考に悩みました。これらの書評を読む内に，書評の対象となった作品を実際に読んでみたいという気持ちにもさせられました。今後も良作・力作をお待ちしております。（山本）